白梅

土佐女子高等学校校友会会報

土佐女子高等学校校友会
〒780-0842
高知県高知市追手筋2−3−1
TEL 088−875−3111
FAX 088−875−2726

［題字　谷脇　梅翠（誠治郎）先生書］

正門の白梅

新講堂　北東角より

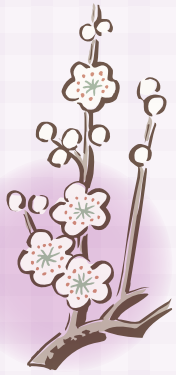
～校舎の沿革～

旧 講 堂	昭和41年
新 講 堂	平成25年
旧北校舎	昭和29年
新北校舎	昭和56年
旧中校舎	昭和37年
新中校舎	平成30年

中校舎と北校舎

在りし日の中庭

東正門周辺



令和4年1月29日（土）第119回高等学校卒業証書授与式挙行

119回卒業式は、音楽はすべて静聴に置き換えられ、来賓も縮小されましたがいつもと変わらず凛とした生徒の態度は土佐女子らしいものでした。

送辞

在校生総代
山本　鈴夏

今、皆様は、この土佐女子での学校生活をどのように振り返っていらっしゃるでしょうか。

世界の人々にとって、この2年余りは努力と辛抱の日々でした。学生である私たちの日常も大きく変わってしまいました。予定されていた行事や部活動の大会が中止されたり、開催されても規模が縮小され、思うようにならず、悔しさや腹立たしさをたくさん抱かれたことでしょう。しかし、そのような状況でも、皆様は前向きで、最後まであきらめず努力を続けておられました。

今年度の重大トピックスといえば、1年間の延長を経て8月に開催された、東京オリンピック・パラリンピックが思い浮かびます。コロナ禍以来、暗いニュースばかりが報道され、心が沈む毎日だったなか、各競技種目における日本人選手の活躍が私達を照らしました。

今回のオリンピックでは全出場選手の49パーセントを女性が占め、これまで男性のみで開催されてきた競技に女性部門が追加されるなど、史上最もジェンダーバランスの取れた大会として、高く評価されました。

どんな状況であっても努力を怠らない。何事も前向きに捉え、全力で取り組む。そして限られたなかでも愉しみを見つけ、笑顔を絶やさずにいる。先輩方から教えて頂いたこと全てが、私達のかけがえのない財産です。これからも、皆様への感謝を胸に精進してまいります。

答辞

卒業生代表
池添　美月

やわらかな光が降り注ぎ梅の蕾が膨らみ始める季節となりました。本日は私達第119回卒業生のために、このような盛大な卒業式を挙行していただき、卒業生一同心より感謝いたします。

卒業という節目に当たって、まず思い浮かぶのは中学1年生春。不安と期待を抱きながらも憧れのセーラー服を着て、この講堂で入学式を迎えた私達は、いつのまにか6年の月日を経て、卒業という巣立ちの時となり、再びここにたっています。長いようで短く、あっという間に過ぎ去ってしまった土佐女子で過ごした日々にはたくさんの思いが詰まっています。

私達の傍にはいつも背中を押してくれる先生方がいらっしゃいました。特に高校最後の1年間は進路に悩み、不安と焦りを募らせた私達の相談にも親身になって一緒に考えてくださいました。これまで沢山の愛情を持って見守ってきてくださった先生方のおかげで私達は成長し、今日という日を迎えることができました。本当にありがとうございました。

そして6年間共に手や足を墨で真っ黒にしながら練習に励んできた書道部の皆。今まで一緒に書道をしてくれてありがとう。高校2年生の時「絆」をテーマに仕上げたあの一つの作品を大好きな仲間達と書き上げたことに語り尽せない程の嬉しさを感じました。この土佐女子で皆と出会えたことを心から幸せに思います。

いよいよ巣立ちの時です。これまで当たり前に過ごしてきた土佐女子での生活が、懐かしい過去の思い出へと変わってしまう今日、この日をもって私達はそれぞれの道に向かって、一歩一歩自分の足で歩んでいきます。

創立120周年

土佐女子の歴史を回顧して、設立の時代に思いを馳せ、女性の地位は一般的に男性よりも社会的に低いとされた時代でありながら、設立に尽力された方々の熱意で学校そのものの地位が、国内でも認められるまでに成長して、様々な危機を乗り越えて来たことがわかります。卒業生の数が多くなった現在、校友会の力を発揮するときが来ていることを意識します。まずは本校の歴史を振り返ってみます。

Ⅰ. 創業期

明治35（1902）年4月創立
横田久寿吉氏の成女学舎と前田松寿女学校を合併して、私立土佐女学校を創立。翌年高知共立学校と合同しこの地に移転して基礎が確立した。昭和26年4月土佐女子高等学校同土佐女子中学校と改称した。
（創立のいしづえより）

学風：創立推進者の一人北村浩氏は「その教育方針は県立高等女学校と私立裁縫学校との中間を行くもので、いたずらに文学的な方へ走らず、また裁縫技芸だけに偏らない。教授時数や学科配当では、文学と技芸とをあんばいし、きわめて実用的な品位ある女子を養成するのが主眼である」と述べている。

Ⅱ. 充実期

第5代中村正持校長の信念・人柄は元来温厚で礼儀正しく、底には、事に臨んでは勇往邁進、時流に抗し、所信を断行した、と記録されている。
先生の5信条、

1. 人生の至楽は教育にあり
2. 教育するは教育せらるるなり
3. 大我の顕現は小我の没却による
4. 寛厳恩威は真愛による。
5. 真個の教育は私学に行はる。

（校友会刊「中村正持先生」より）
先生の信念あふれる言動がそのまま教育であった。この時代、生徒数が増加した。
第6代西内精四郎校長は中村校長にたいしてどこまでも敬意を失わず功績を称え、中村先生の方針を継承した。西内校長は職員に対して思やりがある人物であった。その証として正面玄関の上り口にある西内校長と稲垣教頭のレリーフが掛けられているが、この様子からも納得することができる。
校友会は小高坂山に亡くなった中村校長のための墓地を購入して頌徳碑を建てる計画があった。西内校長は自ら碑文を草して石に刻ませた。この墓地には後に、中村校長、西内校長、稲垣教頭の分骨の墓石が建てられた。当時は、学校上げて追悼祭、墓参が行われたが、現在、墓地は廃止されている。顕彰碑のみ学校正門近くに存在する。
先生は、生徒達を単に家庭婦人に養成するに留まらず、社会人として立派な婦人に仕上げようというのが目標であった。

Ⅲ. 躍進期

第9代木戸耕作校長は、敗戦後から亡くなる平成2年までの長い期間在任された。
見識高邁、経営の才に長じておられ、外柔内剛、毅然たる意志を持ち、謀るに周密、行うに果断、また非凡なる平凡人であれと訴え、「スマイル、スマイル、にっこりスマイル」のように、常に微笑をたたえた女性らしい女性であれと語りかけた。知識偏重ではなく全人間的教育を忘れてはいけないと繰り返し言い続けた。
女子校の特性を生かすために、家庭科を重視し、女子校らしい品位ある礼儀作法は、言葉遣いの指導を実施し、教員はその模範となるよう努めてほしいと言われた。大学に進学できる学力の養成に努め、本校の教育を魅

力あるものにすることがすなわち本校の存続発展につながると説いた。

Ⅳ. 継承期

これまでの発展を継承する時代に入り、様々な設備に気が配られ、教育環境の充実に努めている。

第10代井上源平衛校長は、「学校とは、その名の示す通り勉学するところです。知性高く教養深き女性になってほしい。」

第11代桑原泰雄校長は重点目標として、「教育改革」学習指導要領に則った「スクール・アイデンティティーの継承と確立」を目標とした伝統ある女子校として、保護者や地域社会の期待に添うのはもちろん、「国際化、情報化、科学技術の進歩」といった時代の要請に応え得る女性の育成を目指した。

東日本大震災の教訓から、校舎の耐震対策は万全の備えをしている。

（文責　荒川　操）

土佐女子中高等学校校歌

北見　志保子　作詞
平井　康三郎　作曲

一　オレンジの花咲く国に
誉れも高き学び舎に
集ふ乙女ら春秋の
夢豊かにも育ちゆく
あゝ讃(たた)えなん　我らの母校

二　大いなる我らの母校
誠は天地の光ぞと
教へ給へる恩師あり
春匂ふごと学べとや
あゝ尊しや　我らの母校

三　山沢(やまさは)に常磐(ときは)なす木の
のち継ぐ偉人賢人の
母となる身の誇りあり
愛の恵みに幾星霜
あゝ盛んなり　我らの母校

校友会支部便り

関東支部　支部長
加藤（清遠）壽摩子（69回生）

この度は創立120周年をお迎えになられましたこと、誠にめでたく、謹んでお祝いを申し上げます。また、これまで120年もの長きに亘り、我が校に関する様々な問題に対応して来られた方達のご努力に深く感謝と敬意を表しますと共に、関係者の一人として改めて御礼を申し上げます。

さて、この度重なるコロナの感染拡大によりまして、多くの方々が、その活動を満足に行えず、また活動を躊躇われ、記念行事の開催も思うに任せないなど、本当にご苦労の多い状況であると拝察申し上げます。ただ皆様には、今一度お気持ちを引き締めて頂き、高知城を仰ぎ見る恵まれた環境の下、女子高として伝統を守ってこられました我が校の輝かしい未来に向け、今回のコロナ感染により明らかになりました様々な問題も含めまして、着実な一歩を歩まれますことを心より念じまして、私のお祝いの一言とさせて頂きます。

近畿支部　支部長
中藤（竹﨑）万佐子（62回生）

皆様お元気でお過ごしのことと存じます。この2年間思いがけぬコロナの蔓延で活動の自粛が余儀なくされ、近畿支部では支部員の皆様にお会いすることがかないませんでした。本当に残念でなりません。

今年こそはと期待しておりますが、今この時点でオミクロン株の流行でまだ見通しが立たず、支部の皆様に総会・同窓会の開催ご案内を差し上げられるかは不明です。

一昨年、昨年と支部の総会・同窓会開催中止のご案内をさせていただきました。しかしその中で多数の支部員の方から支部費のご送金を賜りました。お陰様で皆様への通信費等を十分に賄え、今年の活動につなげられます。ご協力いただきましたことを感謝し、心よりお礼申し上げます。

総会・同窓会が開けないのは皆様とお会いする機会も損なわれます。

いままで培ってきた、先輩、後輩の方々との親しい交わりをこれからも変わらず持ち続けたいと願っております。

長年近畿支部長として活動して下さいました浅野勢子さんに代わり2年のお約束でお引き受けいたしましたが、この4月からは69回生の川島芳子さんが支部長職をお引き受け下さいます。また近畿支部実行委員会を組織し、65回生、69回生また、随時に幹事経験者の方の参加をお願いして近畿支部の活動が続けられています。

コロナの日常が普通ではなく、校友会の皆様と自由に交流できる以前のような日常が戻ることを心より願っております。

校友からの便り

校歌の作詞者・北見志保子について

村越　良子（昭和29年卒）

母校の最初の校歌は昭和７年（１９３２）に創立30周年を記念して制定された。現在の「オレンジの花咲く国に　誉れも高き学び舎に」は昭和22年（１９４７）にできた二度目の校歌である。作詞・北見志保子（本名浜朝野、宿毛市出身）、作曲・平井庚三郎（吾川郡いの町出身）。ほかに須崎高校や窪川高校などの校歌もあるが、二人の名を後世に残したのは名曲［平城山］であろう。「人恋ふはかなしきものと平城山にもとほりきつつ堪へがたかりき」「古へも夫に恋ひつつ越えしとふ平城山のみちに涙おとしぬ」これは仁徳天皇と磐之媛皇后の悲話にフランス留学中の恋人を重ねて詠んだ志保子の短歌で、昭和10年に平井庚三郎が作曲し大ヒットした。哀愁を帯びた典雅な名曲として現在も広く愛唱されている。母校創立１２０周年にあたり、愛と情熱に生きた歌人北見志保子の生涯を辿ることにしよう。

北見志保子（朝野）は明治18年（１８８５）１月９日、川島享一郎と勢津の長女として宿毛市に生まれた。下級武士の父は板垣退助に心酔し自由民権運動に挺身したが、志保子14歳のときに死亡。母の勢津は縫物などで６人の子を育て、最期は東京の志保子宅で労苦に満ちた65年の生涯を閉じた。

志保子の最初の夫・橋田東声（本名橋田丑吾）は志保子より１歳年下で中村市有岡（現四万十市）出身の歌人である。志保子が16歳で代用教員として有岡に下宿したこともあって二人は親密になる。明治39年、志保子は21歳で上京。小学校の教員をしながら、東京帝国大学に進学した東声の学費を支援したという。大正２年６月、東声の卒業と同時に結婚、志保子28歳だった。志保子はよく夫を支えたが、２年後の春、東声が突然喀血し発病、大７年頃まで再発を繰り返した。志保子は東声の世話はむろんのこと、義弟の看護のため三度も帰郷するなど思いもよらぬ苦労を重ね、献身の日々に疲労と失望の影が積もっていく。健康を回復してからの東声は仕事も安定し、大正８年に雑誌「覇王樹」の創刊、10年に処女歌集『地懐』出版など作歌活動と研究に打ち込み門弟たちの指導で多忙になるが、子のない夫婦の仲に微妙な変化がきざし始めたのもこの頃であった。

運命の人、後に夫となる浜忠次郎は明治30年生まれ、長野県上諏訪市出身の裕福な毛織物商のひとり息子で、志保子より12歳若い慶応大学の学生だった。二人の出会いは定かではないが、「覇王樹」同人として編集の手伝いなど家によく出入りしていたので、急速に親しくなったのであろう。志保子が忠次郎の友人と３人で旅行したり、一緒に「覇王樹」支社に出向いたりして各地で噂が立ち始め、それはやがて東声の知るところとなる。家庭はたちまち紛糾し、志保子は大正11年７月「心の整理をしたい」と別居を申し出て奈良へ向かい、大学を卒業した忠次郎は同年12月にフランス留学に旅立つ。東声は深い苦悩の中で、大正12年５月、ついに離婚に同意せざるを得なかった。

「悔るとき来るともよしや天地に
　この人をこそわれは恋ふらめ」

こうして自由の身となった志保子は２年余りの別離に耐え、忠次郎が帰国した大正14年に再婚。千代田生命に入社した忠次郎は短歌と縁を切って実業に専念し、昭和22年には社長に就任している。やはり子どもには恵まれなかったが、忠次郎との安定した暮らしの中で志保子は本格的な作歌活動に取り組んでいく。歌風や結社をこえた「女人短歌会」を結成、代表者となり、また自らの歌誌「花宴」を創刊主宰して積極的に同人たちの指導と育成に当たる。古典の勉強にも励み、昭和26年には歌人として宮中歌会始に招かれ陪聴者を務めた。出版した歌集は３冊『月光』『花のかげ』『珊瑚』

郷里の宿毛では、志保子を非難する声が高かったが、昭和26年には帰省し東声の墓参りをしている。（東声は昭和５年12月、45歳で死去）

更に28年５月、母校の宿毛小学校校庭に建てられた歌碑の除幕式に帰省。「山川よ野よあたたかきふるさとよこゝあげて泣かむ長かりしかな」志保子の字で刻まれた歌碑である。東声を去って30年、ようやく訪れた心からの和解、解放であった。志保子は感泣し、故里と亡き母への想いを多く詠んでいる。しかしその後急速に衰え、２年後の昭和30年（１９５５）慶応病院に入院し、５月４日永眠。悦びと哀しみ、波乱に満ちた70年の人生を閉じた。

忠次郎はその後、志保子の弟子と再婚したが６年後の昭和36年９月、脳出血で急死、64歳だった。現在は３人一緒に長野県諏訪市の浜家の墓地に合葬されている。

以上、志保子の生涯を粗略な筆で辿ってきた。今改めて思うのは、四面楚歌のなか真実の欲求に従い忠次郎との愛

を貫き通した情熱、また武田祐吉や池田亀鑑ら国文学者、さらに最晩年に慶応大学の聴講生となって折口信夫から万葉集や源氏物語などを学んだひたむきな努力、探究心の強さは余人にない優れた志保子の資性だったということである。高知の生んだ誇りうる歌人として多くの方々に再認識していただきたいと切に願っている。

中川　恵一先生　いのちの授業
「がんを学ぼう」を聴いて

とき：令和2年1月29日（水）
13時25分～15時10分
ところ：土佐女子中学高等学校
生徒ホール
趣　旨：「地域で取り組む健康について」の一環として、がんに対する正しい知識を学ぶとともに、生きること、死ぬことを問う中で、お互いの尊厳に気づいて思いやる心を養う。
内　容：がんの基礎知識と体験談
講　師：東京大学医学部付属病院放射線科准教授と子宮頸がん経験者
対　象：中学2年生
主　催：公益財団法人
高知県相互健康協会

校長室で

初めて中川恵一先生にお目にかかってお話をお聞きした時の印象は「なんでも質問に答えてくれる大きなやさしさが感じとれました。この時、がんという病気について知りたいという気持ちが私を生徒ホールへと押し上げました。

実は、今から8年前の今頃、千葉県に住んでいた私の弟が散歩の行き帰りに見る病院に妙に気になる体の不調を診てもらうために立ち寄ったのが始まりでした。胸のあたりが何かつかえたような違和感があるというのが医師に相談した内容でした。勿論検査の結果、怪しいところが発見されました。それからは否が応でもがん治療の方向に進んでいきました。お薬をいただいて飲めば何とかなるものではありませんでした。医師の診たてはこの様子では夏まで持つかどうかという耐えられないほどの厳しいものでした。私たちは何とか助けてくださいと神に祈るしか術がありませんでした。手術を受け、抗がん剤を飲み、放射線治療も受けることにしました。その結果、夏が過ぎ、11月まで命をつなぐことができました。

そして、東京大学医学部付属病院放射線科准教授中川恵一先生が、本校の中学生に「いのちの授業」をしてくださったのを機会に、その内容がすべて「がん専門医が、がんになって分かった大切なこと」に集約されていることを知り、読んでみました。同時に副題の「がんは運です。ただ、この運、不運を決めるのは、他でもないあなたです。」も私の心に響くものでした。何とか「白梅」を読んでくださる校友の皆さんにこの本を読んでいただきたいと思ったのが始まりでした。

ここからは、中川先生が本の「はじめに」の部分に書かれていることが、私の弟の命の終わりを迎えた時の出来事と相まって、がんという病気を考える切っ掛けとなりましたのでご紹介します。最初は、会報に中川先生の講演の内容をそのまま載せることができればと単純に考えたことから始まりましたが、それは同時に自分自身が少しでも勉強しなければ、先生のがん治療に対する思いまでは理解できないと思いました。

ここからは、「はじめに」の内容になります。

日本人男性の3人に2人、女性でも2人に1人が、がんになります。私は新聞の連載や講演などで、「がんになることを想定しておくべき」などとお話ししてきました。しかし、自分も「がん患者」になろうとは露ほども思っていませんでした。

多くのがん患者が「まさか自分が」と言いますが、私もまったく同じでした。35年間もがん医療に携わってきた専門医の私ですらそうなのですから、私たちは自分が、がんになるといった意識は持たないように「プログラム」されているのかもしれません。

生徒ホールで講演

いきものは「自分が死ぬ」とか「重い病気になる」などといったことを心配しながら生きるのではなく、今日を生きる存在なのでしょう。「死ぬのがコワイ」とか「いつ死ぬのだろうか」などと心配するネコはいないということです。

しかし、私たち人間には、言語も理性もあります。私自身の経験を通して分ったことを多くの方にお伝えするべきだと思い、この本を出版することにいたしました。

がんは運不運に左右される病気です。発がんの最大の要因は「がんに関連する遺伝子に起こる偶発的な損傷です」まさに「運」です。

喫煙や飲酒などは遺伝子にできキズの

発生頻度を高めます。運動やカロリー制限は損傷の頻度を下げます。しかし、どんな立派な生活をしていても、生きているだけで遺伝子には「経年老化」が起こります。年齢とともに、がんができやすくなるのはこのためです。

ヘビースモーカーで大酒飲みでもがんにならない「運のよい人」もいます。逆に、完璧な生活習慣でもがんになる人もいます。検診もすべてのがんを見つけることは不可能です。がんには運の要素もあることは確かです。

私の膀胱がんも、わかっているリスク要因は喫煙だけ。私はタバコを吸いませんから、発がんの理由は「不運」ということになるでしょう。もっとも、肝臓の検査のついでに、偶然、早期に膀胱がんを発見できたのは幸運でした。酒飲みでなければ、肝臓の超音波検査もしなかったと思います。まさに、「禍福は糾える縄の如し」です。

「がんの最大の要因は運」などというとガックリするかもしれませんが、人生には「運・不運」がつきものです。

人生は実力以上に運の要素が大きいのではないかとさえ思います。出世街道まっしぐらで順風満帆の人生を歩んできた人が交通事故で突然亡くなることもあります。

交通事故死を避けるには、まず安全運転が大切です。それでも、相手が無謀な運転をすれば事故に巻き込まれてしまいます。そのときに命をまもってくれるのがシートベルトです。がんの場合は、生活習慣が安全運転、早期発見がシートベルトに相当します。

生命保険文化センターの平成28年度「生活保障に関する調査」によると、生命保険に加入している人は男性では80.6％、女性では81.3％となっています。

これは、人生に運もつきものと思っているからでしょう。

がんは人生のすべてのイベントと同じく、運に左右される病気です。しかし、35年間がんの医師をやってきた経験からいえることは、がんにまつわる運・不運は知識や行動で挽回できます。がん検診で早期に発見すればがんは95％は完治します。がんの運・不運はある程度は克服できます。「人事を尽くして天命を待つ」ことが大切です。

「人生百年」に立ち塞がる高い壁がこの病気です。私の経験を皆さんの人生にプラスとしていただけましたら幸いです。

「一人で始めた中学生へのがん教育」の項目に、「２００６年６月、がん対策基本法が議員立法として全会一致で可決・成立しました。

この、がん対策推進協議会において私の発言が契機となり、がん教育の議論が始まりました。そういう意味で、がん対策基本法あるいは基本法が定める協議会が、大きな役割を果たしました。」と述べています。

中学校で分かり易くがんについてお話いただいたことは、生徒達のみならず、私たちも「がん治療に対する認識」が変わったように思います。文責　荒川　操

「元気な暮らしはお口から…」

西岡（田村）仁子（昭和52年卒）

校友会及び同窓生の皆様、コロナウィルス拡大の中、大変な思いをされている方々が多くおいでになるのではと気がかりでなりません。皆様が元気で居られることを切に願っております。

親子線のセーラー服を着て通っていた日々も、ほんのこの前のように感じますが、卒業して45年も経ちました。未だに在学中のことが身近に感じるのは土佐女子で出会った仲間たちと今でも同じようにお付合いが続いているからでしょうか。同じ空間、時を共にした仲間と会えば昔のままの素の自分で居られます。土佐女子で学び得たものはたくさんありますが、私の一番の宝物はやはり親友たちです。

校友会役員の友人を通じ恩師の荒川先生と久々にお目にかかることができました。パワフルで先生の魅力的な笑顔はお変わりなく嬉しかったです。帰り際には、ニコッと笑って原稿提出お願いね。と大きな宿題も頂きましたので老眼鏡と共にトライ！

私は歯科衛生士として歯科医院で10年程勤務しました。その間、医療に対し名声ではなく誠実に向き合う姿勢を院長から学び、退職後は市町村の依頼で地域歯

（図１）

（図２）

科衛生士として乳幼児健診や成人検診、保育園や子育て支援、地域交流会などで歯科指導や相談を行なっています。資格とまた子育て経験も活かせる楽しい仕事に携わり28年程になります。昨年末ある地域交流会で「体の健康はお口から」というお話をさせて頂きました。皆様にもご自分のお口に再度興味を持ち健康に保って頂きたく一部ですが紹介させて頂きます。最近よく「フレイル予防」という言葉を耳にすることが多くなりました。フレイルとは、加齢に伴い心と体の働きが徐々に弱って要介護状態の手前の虚弱の状態をいいます。それに加え、しっかり噛めない、よくむせる、飲み込む力が弱くなった等、口の機能の衰えを「オーラルフレイル」と呼び、フレイルと大きく関わってきます。元気にいきいきと暮らすためには（図1）の4つが重要な柱となるのです。80才で20本以上の歯を残そう＝8020運動といい、20本以上の歯があれば、ほぼ満足な食生活ができ、おいしく食べられると言われています（図2）。そして口の健康は全身と繋がっています。歯周病やむし歯を放置し炎症が広がると歯周病菌等は血液によって運ばれて体に悪影響を及ぼすことがわかってきました。特に糖尿病とは相互に深い関係があり歯周病を改善すると糖尿病の血糖値の改善がみられることがわかってきています。さあ、元気に生活していくために、口から始める健康習慣をつけましょう！

①歯ブラシに加え歯間ブラシやデンタルフロスを使って歯と歯の間も磨きましょう。

②フッ素入り歯みがき剤を使ってむし歯を予防しましょう。

③お口の体操などをして、しっかり食べられるお口をつくりましょう。

④歯科定期検診を受けましょう。

※健康なお口を維持するためには、セルフケアとプロによるケアが重要です。マスクが必須になり、お口のケアが疎かにならないように気をつけましょう。又コロナ禍の受診控えなど治療途中で勝手に中断することは良くないですので必ず相談しましょう。人生は100年時代へ…だれでも住み慣れた家、又地域で元気に生活し続けたいと願うはずです。そのためには歯と口の健康を維持し、健康寿命を少しでも延ばすことが重要です。歯科衛生士とは、歯科予防処置、歯科診療の補助、歯科保健指導と歯や口腔の管理をし、体の健康も保てるようにサポートするやりがいのある仕事です。国家資格の専門職で、専門性を活かし求められる職域も広がっています。拙い文章でしたが、お口と体の関係などを知って頂く機会を与えてくださった先生に心から感謝申し上げます。

土佐女子中学卒業後の私

井関　佐和子（平成6年中学校卒）

私が舞踊に出会ったのは、3歳のとき。まずバレエを始めました。私の記憶に残っているのは、6歳くらいになった頃からです。ちょうど自分と人を比べるようになる年齢かもしれません。

負けず嫌いの私は、自分の能力はさておき、同じ年齢の子たちより、うまく踊る、一番前で踊る、と言った単純な動機で頑張っていました。その頃から既に海外のバレエダンサーの雑誌を見ては、強い憧れと夢を持っていました。

16歳で海外に留学するまでは、毎日がバレエ漬けでした。学校から帰宅後も、友達と一緒にどこかに行くようなことはほとんどなく、スポーツ系の部活で賑やかにしている友達を少し羨ましく思いつつ、自分が生きる道は（認められる）舞踊しかないと思っていました。

私の恩師は、私が本来持っていた感情表現の部分を大いに伸ばしてくださいました。それが自分の強みだということを、15歳の頃には感じていました。裏を返せば、世界のバレリーナにはなれない（その素質を持っていない）ということを、私は既に悟っていました。

16歳で海外へ1人で旅立ち、いきなりの1人暮らしで、もちろん言葉も通じない環境で、初めの1ヶ月は、大袈裟ではなくこの世の終わりを感じていました。毎日が怖くて、寝れない日々。人とも話すことができない。しかし踊っている時だけは、恐怖がなくなりました。言葉でなくても通じ合えるものがある。踊りを通してのコミュニケーションが、私を救ってくれました。

そして19歳。若い頃から自分はクラシックバレエの世界では、自分の満足できる場所（地位）にはいけないことを悟っていたので、クラシックバレエではなく、当時ヨーロッパでブームとなっていたコンテンポラリーダンス（現代舞踊）の有名なカンパニーに、オーディションに行きました。

倍率は300分の1という狭き門ですが、なぜか不思議と自信がありました。

写真：篠山紀信

世界中からオーディションに来るダンサーは、スタイルも抜群で、自己主張もしっかりしていて、私なんかより舞踊に適している人たちでした。しかし適正が何かと決めつけること自体、芸術の世界では間違っているのです。

直感でそのことをわかっていた私は、審査する人々の目を、私に向ける「踊り」ができたんだと思います。今私は、審査をする側の立場になっているので、それがとても重要だということを実感しています。

そして19歳で、誰もが憧れるカンパニーの仕事をもらいました。その瞬間子供の頃からの夢が一つ叶ったのです。そこからプロの舞踊家としてヨーロッパで働くことになりました。

25歳。私の舞踊人生の第2章がここ新潟で始まることになりました。私が所属しているＮｏｉｓｍというカンパニーは、日本で唯一の劇場専属舞踊団。簡単に言えば、市からお給料をもらっているプロの舞踊団ということです。海外では当たり前のことですが、日本ではここ新潟だけなのです。

その舞踊団を作った人が、金森穣という演出振付家です。彼も17歳からヨーロッパで学び、有名カンパニーでプロの舞踊家として踊って来ました。その彼が弱冠29歳でこの日本に戻ってきて、日本の舞踊界の歴史を変えました。

私は彼と、22歳の頃（彼は26歳）にオランダで出会いました。彼は私の舞踊人生を変え、戦友となり、同志となり、そして人生の伴侶となりました。

今年、新潟での活動も18年目を迎えました。18年という歳月は長いかもしれません。けれど私自身は、未だ成し遂げられていないことばかりで、「やっとここ」という気持ちと、「まだここ」という気持ちを抱きながら、43歳になった今も充実した日々を送っています。

ここで私のプロの舞踊家としての日々をお話ししたいと思います。

まずバレエクラスが10時半から始まるので、7時半起床、9時には劇場入りをして、ストレッチやエクササイズをして、その日の身体がどうなっているのかを確かめつつウォームアップをします。

10時半から1時間15分のバレエクラスです。これは毎日必ずみんなでやる稽古になります。休憩の後、これから控えている公演で上演する作品の創作、または稽古に入ります。途中にお昼休憩を1時間挟みますが、12時から18時までです。（火曜日から日曜日まで毎日です）そして家に帰り、夕食を作り、お風呂にしっかり入り、恒例の夜のストレッチとエクササイズ、マッサージの時間に入ります。そして就寝。

本番を控えている日は、公演が夜なので、時間をずらして活動します。13時にバレエクラスを始めるため、9時起床、11時頃に劇場入りをして、ストレッチなどをしつつ、本番の衣装確認なども行います。クラスの後は、照明など細かいことを合わせながら、本番2時間前まで稽古をします。そしてお昼を軽く（基本はおにぎりを一つ）食べて、メイクをして、1時間前には本番のために再度身体作りを始めます。15分前に衣裳に着替えて、舞台に上がり19時に本番。

公演の長さにもよりますが、本番の後は基本、直ぐにマッサージを行います。なので、家に着くのは22時頃。そこから夕食を取り、そして本番を撮影したビデオをチェックします。さっきまで踊っていた自分を客観的に見て、自分にダメ出しをして、次の日の本番への注意点などをメモする時間です。そしてやっとお風呂に入り、軽くストレッチをして2時頃までには就寝。次の日へ疲労を残さないためにも最低7時間は寝ます。

プロの舞踊家は働いている時間だけでなく、常に自らの身体を磨き、美意識を強く持ち、芸術性を養わないといけません。どれかが劣ると必ず舞台に現れます。チケットを購入して観に来てくださる方々に、日常を提供しているのではなく、非日常を体験をして、感動していただくことが重要なのです。そのためには努力が必要不可欠です。

もちろんたくさん笑い、たくさん泣き、大いに失敗することも、人としての成長を促し、それが舞台につながると言うことも忘れてはいけません。私の尊敬する芸術家の方の言葉で、「月ほど願って豆ほど叶う。人生とはそんなもの。豆ほど願って月がやってくるなんてことはあり得ない。」とあります。

「何かがあるから信じるのではなく、信じるからあるのだ。」と私は信じ、この道をこの人生を全うする覚悟があります。そしてそれが、未来の舞踊家たちに受け継がれていくことを願っています。

写真：篠山紀信

井関佐和子
舞踊家。Ｎｏｉｓｍ副芸術監督。
１９７８年高知県生まれ。３歳よりクラ

シックバレエを一の宮咲子に師事。16歳で渡欧。スイス・チューリッヒ国立バレエ学校を経て、ルードラ・ベジャール・ローザンヌにてモーリス・ベジャールらに師事。'98年ネザーランド・ダンス・シアターⅡ（オランダ）に入団、'01年クルベルグ・バレエ（スウェーデン）に移籍。'04年4月Ｎｏｉｓｍ結成メンバーとなり、金森穣作品においては常に主要なパートを務め、現在日本を代表する舞踊家のひとりとして、各方面から高い評価と注目を集めている。第38回ニムラ舞踊賞、令和2年度（第71回）芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

歌に魅せられて

川崎　利枝子（昭和47年卒）

ある日の午後、突然荒川先生から電話を頂きました。

「今度の『白梅』にあなたの音楽活動のことを書いて頂戴。」とのこと。「先生、私は大した活動などしていないのでお受けできません。」と即答するも「あらもう決めましたからね。」と先生。間もなく速達で原稿用紙が届き、もう逃げられないと覚悟をしてペンを取った次第です。

欧米ポップス・ロックが華やかなりし60～70年代に多感な青春時代を送った私は、日本の演歌や歌謡曲とは違う独特のリズムやビート、斬新なコード進行やバッキングコーラスの複雑で豊かなハーモニーに驚き感動しました。メロディーに乗った抑揚、緩急に富んだ英語の歌詞そのものにも夢中になり、気に入った曲はレコードを購入しすぐに覚えては口ずさんでいました。英語の基本的な発音はこれらの歌から学んだように思います。

東京での学生生活は、大学祭やイベントでのバンド演奏に明け暮れ、（今思えば親に申し訳ないですが。）学業は二の次という音楽中心の楽しい日々でした。

卒業後、高知に戻り金融機関に就職。結婚、出産後は子育てに忙殺され、バンド活動とは縁のない生活を送っていました。

ただそれでも英語好きが変わることはなく、英会話のスクールやクラブには頻繁に通い、英語を喋ることが楽しくなっていました。来高した外国のダンスチームや交換留学生の通訳を依頼されるうちに、今度はちょっと大人の歌、ジャズなんか歌ってみたいな、という思いが芽生えてきました。

丁度その頃、ライブバーでジャズを歌っているＴさんから、「歌いに来ない？」と、誘われ再びマイクを握ることになったのです。地元のジャズフェスタ等に出演するうちに、ビッグバンドから誘われ、色々な構成のバンドで歌い始めました。人生第2のバンド活動の始まりです。

元プロの方との共演も増え、あれよあれよとライブをこなしていくうちに随分と鍛えられました。もちろんハプニングにも何度も見舞われました。今思い出しても冷や汗が出ますが、本番前夜に到着したゲストのトランペッターの方と歌うボーカル用の楽譜と歌詞が、こちらに届いていなかったことも。この時ばかりはもう駄目かもしれないと途方に暮れました。しかしやれるだけのことはやろうと決心し、その歌が使われている米国映画を検索し、メロディーと歌詞をなんとか覚えたときには、東の空が白み始めていました。おまけにその数日前より息子が風邪を引いており、やがて私も鼻は詰まり喉は腫れ、最悪の状態で本番に臨みました。いよいよ問題のデュオ曲の始まりです。笑顔で並んで歌っていても頭の中は徹夜で覚えた歌詞とメロディーがぐるぐると回っています。会場の拍手で終わったと気づいたときは、ステージにそのまましゃがみ込みそうになりました。

もう一つ忘れられないライブがあります。

ある病院施設のお招きでリクエストがあり、『蘇州夜曲』を歌ったときのことです。認知症とおぼしき患者さんが突然椅子から立ち上がり、実に見事にスラスラと歌い始めたのです。自分の好きなジャンル、いわゆる洋楽ばかり歌っていては駄目だ。広く親しまれている日本の歌もお届けしようと、決心した瞬間でした。

やがて気の合う音楽仲間もでき、ボーカル中心のバンドが結成されました。ペギー☆リエｗｉｔｈラスティックスの誕生です。現在の9人編成になって、かれこれ10年になります。

いまこうして、バンド活動を振り返ってみて有り難く思うことは、ライブのたびに土佐女子の同級生が応援に来てくれることです。もちろん、先輩や後輩もです。

「土女ペギー組」なるグループラインも作られ、多くの同級生と繋がりました。当初はライブの告知が目的でしたが、今では趣味の作品展のお知らせや情報交換の場にも活用され、同級生同志の絆もより深まり、嬉しく思います。

定例ソロライブの日に合わせてわざわざ帰省してくれる同級生達もいて、会場はさながらミニ同窓会のようでもあります。和洋問わず青春時代の懐かしい歌を

歌えば、皆もう座ってはおれません。ステージの前に出てきて踊りだすわ、中にはフラダンスを披露する人も…。多少体型の変化？はあるものの、セーラー服時代のこぼれる笑顔は変わりません。

年々歳を重ねるごとに、はしゃいだり、心ときめくことが少なくなってゆくように感じますが、青春時代の昭和歌謡やオールディーズを大好きなジャズと共にお届けし、それでお客様が非日常を味わい、気晴らしができるのであればこんなに嬉しいことはありません。

これからも心躍る楽しいライブをバンドの仲間と共にお届けして参りたいと思います。

母校土佐女子中高を訪ねた宮本葉月さん（平成31年卒）

宮本葉月さんへ

彼女が中学1年生の時、高知県庁に尾崎正直知事を訪ねたことがありましたが、水泳部の顧問の先生に付き添われて静かに座っているほっそりした彼女を見て、怖くないかと馬鹿な質問をしたことを憶えています。学年が進み身体も心も成長してきた彼女を見て、陰ながらたくましくなったなと感じていました。私達が期待していた通り、試合以外は学校を休むことなく、友達との関係も良く、明るい学生生活を送っていました。もちろん指導者との関係も良かったのでしょう。見事に結果をだすことができました。これからもずうっと応援しています。

高知新聞　2021年（令和3年）8月13日（金曜日）（12）

母校の土佐女子中高を訪問し、後輩の出迎えを受ける宮本葉月。「こんなに歓迎してくれるとは」と喜んだ

五輪開会式 人生観変わった

帰高の飛び込み・宮本に聞く

東京五輪にただ一人の本県出身選手として出場した飛び込みの宮本葉月（近大・高知SC）がこのほど帰高。大舞台に臨む までの苦労や、五輪での貴重な体験などを振り返ってもらった。

1年つらかった

宮本は五輪本番までの1年間が「一番つらかった」と打ち明けた。榎本遼香（栃木県スポーツ協会）とペアを組み、2020年2月の国内選考会で日本代表になったものの、五輪最終選考会となる同年4月のワールドカップ（W杯）は新型コロナウイルスの影響で1年延期に。さらに今春の開催直前には、一時、中止が検討された。

「大会に合わせて準備したのに、と力が抜けた。周囲には他の競技で（五輪）代表になったアスリートも出始めていて、うれしい知らせなのに、ねたんでしまう。そんな自分も嫌になった」

中止方針が覆って開催されたW杯で五輪代表になった後も、心が揺れる日々が続いた。五輪に対する世論の風当たりが強く、ネットニュースのコメント欄には選手に向けられた批判も多かった。「私はどうしたらいいの、と苦しかった」という。

救いになったのは、「五輪に出ることで得られる人生経験」。東京大会で6度目の出場を単たした男子代表の寺内健（ミキハウス）から、その素晴らしさは聞いていた。実感できたのは開会式。入場が間近になり、ゲートの向こうに明るい空間が広がっていた。

「暑い日なのに、鳥肌が立った。『こんな世界があるんだ』と人生観が変わる瞬間だった」

信じ合えたから

開会式では、テレビ画面に映ることを、とにかく意識した。

「カメラが左にあることは知っていた。最初は左側に差ばされたけれど、すぐに左へ。私を待っている人に、自分の姿を伝えたかった」元気な宮本の様子は何度も画面に映し出された。

迎えた本番。途中までは思い通りの演技ができた。4本目は前を向きながら後方に飛ぶダイブで、心理的な要因が大きい。力が入って得点を伸ばせず、最終5本目も宮本が入水でミスをしてしまった。

「私のせいでどうせ（最下位の）8番」とふさぎかけたが、順位発表は5位。「もう少し頑張れたかもしれないけれど、それまでの準備も含めて、いい大会になった」

榎本とは、これ以上ない信頼関係を築けた。周囲から見たら問題のない演技でも「2人の間で納得がいかなければ気持ち悪い。そこまで感じられる関係になった」

これまでの練習では多くの本数を飛ぶ宮本に対し、確かめるように飛ぶ榎本の本数は少なかった。「お互いが感化されて、量も多く、質の高い練習になった。だからかも伸ばせた」シンクロの相乗効果で個人の技量も伸ばすことができた。

何より、榎本は試合の場では決して宮本を非難しなかった。「私のミスでも『いい演技をさせてあげられなかった』と気遣ってくれる。最高の相方でした」

後輩のためにも

帰高後、自身が育った高知SCに顔を出した。喜ぶ後輩たちを見ながら、気になったのは故郷の飛び込み環境だ。

春野プールは屋外の飛び込み台で3場は飛べない。「私は強化費もあって県外で練習を積めた。でも、後輩たちは多場のブランクが大きく、シーズン当初は恐怖感の克服ができない。少しでも環境が整備されてほしい」

高知県に育てられ、五輪に出場できたという思いが強いからこそ、練習環境の改善を望んでいた。

（吉川博之）

「五輪は夢の舞台。開催してくれただけでありがたかった」と話す宮本（土佐女子中高）

準備含めいい大会に■榎本は最高の相方

高知市役所を訪れた宮本。職員、市民らから拍手で迎えられた（反田哲昭撮影）

夢に向って

小松　ゆい（平成31年卒）

右から３人目が小松ゆいさん

昨年、二十歳という節目の年を迎えました。コロナの影響もあり、残念ながら一生に一度の成人式に参加することはできませんでしたが、このような苦しい状況の中でも、成人の日を迎えられたことに嬉しく思います。

昨年は新型コロナウイルス感染拡大という未曾有な事態に陥り、生活様式が大きく変化した1年でした。私は日本で新型コロナが流行り始めた頃、正直自分の中で軽く受けとめていました。しかし、国内でも感染者が増え続ける日々が続き、尊い命さえも奪っていく状況に改めて身の危険を感じさせられました。そして何度も過去最多を更新する感染者数に、慣れてしまってきている時もありました。もうすぐ2年がたとうとしていますが、完全な終息の目処が立たない今、大会が次々と中止になり目先の目標が立たない日々が続いています。でも私はこの期間をきっかけに、自分と向き合う時間が増えました。行動が制限される状況をプラスに捉え、今だからこそできること、そして自分が必要としていることを改めて確認することができました。

今年は海外遠征が中止になったせいもあり、昨年よりもチーム揃って練習することが増え、先輩方の球を受ける機会が多くなりました。一緒に練習することで課題が見つかり、1つ壁を越えることでもっと強くなりたいという向上心が芽生えました。私が所属する北都銀行には、日本代表選手として、世界で活躍する選手が多くいます。その中の環境で練習ができるということは、当たり前なことではないと思います。高校まで地元を離れることなく、バドミントンを続けてきた私にとって想像がつかないことでした。自分にはない考えや経験を聞くことで、また一つ成長に繋がっていきます。今だからこそ学ぶことのできるこの時間を大切にしていきたいと思いました。

高校3年生の私は、強いチームでバドミントンがしたいという一心で秋田に拠点を移すことを決意し、地元を離れました。しかし高知から離れて年月が過ぎた今では、日頃から応援してくれる家族や友人、そして私が高知に帰った時にはいつも温かい言葉をかけてくれる先生や指導者の方々に恩返しがしたいと、改めて強く思うようになりました。

さて、本校を卒業して3年が経とうとしています。バドミントンばかりしてきた私が皆さんに伝えられることとしては、いま自分の周りでサポートしてくれる方や、いつも応援してくれる人たちとの関係を大切にしてほしいということです。どんなに辛いことがあっても、一番に支えてくれるのは結局、家族や仲間だと思います。私は学生時代、怪我で何度も辛い経験をしました。それでも、今の自分があるのは私に関わってくれた沢山の人たちの支えがあったからです。その人たちに、私が日本や世界の舞台で勝つことによって1日でも早く恩返しをすること、そして多くの人に感動と勇気を与えられるような選手になることが私の目標です。皆さんにも、それぞれ夢や目標があると思います。その夢や目標に向かって、一緒に寄り添ってくれる人や身近に応援してくれる人を大切に思うことを忘れずに、日々頑張っていきましょう。

成人式を迎えました

―117回卒業生―

土佐女子
ファミリー
インタビュー

「土佐女子でよかった」
卒業生たちの声

（土佐女子学校案内より）

夢への第一歩は土佐女子のおかげ

高知大学医学部医学科 2回生
竹内 晴菜さん

私の土佐女子中高での6年間は、とても充実していました。私の所属したコーラス部では厳しい練習の成果もあって、常に全国の大舞台に立つことができました。

また、学業では先生方の熱心な指導の下、医学部合格に導いていただきました。切磋琢磨できる友人や生徒一人ひとりの夢に寄り添ってくれる先生方がいて、さまざまな経験が積め、一生の思い出になる学校です。母校が土佐女子であること、それが私の誇りです。

全力でやりたい事に取り組めた6年間

大阪大学外国語学部
外国語学科・英語専攻 2回生
坂本 奈津希さん

土佐女子での生活を振り返ると、勉強や部活動、学校行事の全てにおいて充実した6年間が蘇ります。

私は弓道部員として高校3年生まで活動しつつ勉強に取り組み、共に切磋琢磨する友人や、先生方の熱心な指導のおかげで第一志望の大学に合格することができました。

この学校には自分のやりたい事に全力で取り組める環境が整っています。多くのことを経験する中学、高校時代を土佐女子で過ごせて本当に良かったと思っています。

受け継がれる念い

第73回 卒業生 元女子バレーボール選手
竹島 晶代 さん
（2020年東京オリンピック聖火ランナー）

土佐女子中学校に入学してから、当時のバレー部監督だった松山宏先生に声をかけてもらい始めたバレーボール。還暦を過ぎた今でもバレーボールに関わっています。

1980年のモスクワ五輪は代表に選ばれていたものの日本がボイコットした為、幻に終わってしまいました。あれから40年…2020年東京オリ・パラの聖火ランナーに選んでいただき古里高知で走ります。

アスリート達の念いを少しでも東京へ繋ぐ様に、そして来年120周年を迎える母校の後世に続く繁栄を願い走ります。

「楽しみます!!」

（2021年4月 現在）

校友会からのお知らせとご報告

第17号 会報協力金についてのご報告

令和３年　会報協力金回数別入金表　　令和４年１月現在

回数	入金人数	入金額	回数	入金人数	入金額	回数	入金人数	入金額	回数	入金人数	入金額	回数	入金人数	入金額	回数	入金人数	入金額
38	1	2,000	53	30	43,000	67	46	91,000	81	14	35,000	95	6	8,000	109	9	13,000
40	5	5,000	54	21	28,000	68	32	41,000	82	20	41,000	96	10	11,000	110	5	5,000
41	4	7,000	55	29	44,000	69	27	43,000	83	16	18,000	97	3	3,000	111	11	13,000
42	4	12,000	56	41	61,000	70	36	53,000	84	13	21,000	98	10	19,000	112	8	8,000
43	3	12,000	57	37	79,000	71	29	57,000	85	10	28,000	99	6	6,000	113	8	8,000
44	8	19,000	58	38	62,000	72	38	109,000	86	21	30,000	100	10	19,000	114	10	11,000
45	3	5,000	59	47	47,000	73	38	57,000	87	19	29,000	101	5	5,000	115	17	21,000
46	10	26,000	60	35	50,000	74	39	77,000	88	7	30,000	102	7	11,000	116	30	32,000
47	3	3,000	61	30	64,000	75	35	40,000	89	18	49,000	103	8	8,000	117	20	25,000
48	12	56,000	62	62	107,000	76	35	46,000	90	12	36,000	104	5	5,000	118	46	48,000
49	21	36,000	63	68	144,000	77	43	73,000	91	9	18,000	105	4	4,000	一般	4	5,000
50	23	47,000	64	59	121,000	78	27	39,000	92	13	41,000	106	2	6,000	**合計**	**1,686**	**2,913,000**
51	43	74,000	65	40	79,000	79	32	52,000	93	10	30,000	107	10	10,000			
52	40	72,000	66	47	75,000	80	18	26,000	94	8	16,000	108	3	3,000			

会報発行協力金収支報告（発行部数18,191部）

収入	協賛金	2,599,735円	総数1,686名
支出	印刷費	800,404円	
	発送費	1,266,370円	
	その他	733,226円	宛名出力代など
	支出合計	2,800,000円	
	残金	0円	

（※差額は㈱サラトが負担）

会報協力金につきましては、昨年よりも多くの方々からご入金があり、ありがとうございました。ここ数年は赤字続きでしたが、今回はコンビニを利用された方が多くありましたのでその分多くなりました。会報費用以上に入金されますと校友会の収入につながり、様々な校友会活動に使うことができます。将来学校の生徒達のために使う基金作りの計画にも夢が広がります。

令和２年度 収支決算報告書

自　令和２年４月１日
至　令和３年３月31日

（円）

収入	
科目	決算額
入会金	588,000
預金利息	60
寄付金	10,000
2020こうち総文協賛金返金	200,000
収入計	**798,060**

（円）

支出	
科目	決算額
事務費	49,744
通信費	13,008
会議費	35,366
印刷費	287
振込手数料	1,083
雑費	432,595
慶弔費	46,500
行事費	386,095
支出計	**482,339**

参考

《収入》

○入会金　3,000円×196名　**588,000**
（高３／１人　3,000円／196名分）

○寄付金
卒業生（52回生）より　10,000

（当期収支差額　315,721は、本会計へ）

令和４年度（令和３年度卒業生）進学状況

❶ 国公立大　　お茶の水女子大学・岡山大学・香川大学　他　34名現役合格

（うち県内国公立大学24名）

❷ 慶應義塾大学　１名、ＭＡＲＣＨ・関関同立　14名現役合格

大学別合格者一覧

国公立大学		
1	お茶の水女子大学	1
2	岡山大学	4
3	香川大学	1
4	高知大学	8
5	釧路公立大学	2
6	愛知県立芸術大学	1
7	兵庫県立大学	1
8	高知工科大学	5
9	高知県立大学	11
計		34

私立大学		
1	文教大学	1
2	青山学院大学	2
3	慶應義塾大学	1
4	國學院大學	2
5	駒沢女子大学	1
6	昭和女子大学	3
7	女子美術大学	1
8	白百合女子大学	2
9	創価大学	1
10	大東文化大学	1
11	玉川大学	1
12	中央大学	2
13	帝京大学	1
14	東京家政大学	1
15	東京電機大学	1
16	東京薬科大学	1
17	東洋大学	1
18	日本大学	1
19	日本女子体育大学	1
20	日本体育大学	1
21	法政大学	3
22	武蔵野音楽大学	1
23	武蔵野大学	1
24	関東学院大学	1
25	中京大学	1
26	名城大学	1
27	鈴鹿医療科学大学	1
28	京都外国語大学	2
29	京都先端科学大学	2
30	京都産業大学	5
31	京都橘大学	1
32	京都光華女子大学	1
33	同志社大学	1
34	同志社女子大学	2
35	龍谷大学	5
36	追手門学院大学	2
37	大阪音楽大学	1
38	関西大学	3
39	関西外国語大学	2
40	摂南大学	4
41	桃山学院大学	3
42	大和大学	1
43	関西学院大学	3
44	甲南女子大学	3
45	神戸学院大学	8
46	神戸国際大学	2
47	神戸女学院大学	5
48	神戸女子大学	12
49	神戸松蔭女子学院大学	3
50	神戸親和女子大学	3
51	関西福祉大学	3
52	姫路大学	1
53	岡山商科大学	1
54	川崎医療福祉大学	1
55	倉敷芸術科学大学	1
56	就実大学	3
57	美作大学	5
58	環太平洋大学	1
59	広島女学院大学	1
60	福山大学	2
61	安田女子大学	3
62	広島国際大学	1
63	徳島文理大学	3
64	松山大学	1
65	高知リハビリテーション専門職大学	7
66	高知学園大学	16
計		159

短期大学		
1	実践女子大学短期大学部	1
2	大手前短期大学	1
3	奈良芸術短期大学	1
4	川崎医療短期大学	1
5	就実短期大学	1
6	美作大学短期大学部	1
7	徳島文理大学短期大学部	1
8	高知学園短期大学	14
計		21

専門学校		
1	高知病院附属看護学校	3
2	土佐リハビリテーションカレッジ	5
3	龍馬看護ふくし専門学校	2
4	近森病院附属看護学校	3
5	四国医療工学専門学校	2
6	高知ペットビジネス専門学校	1
7	高知公務員学院	2
8	大阪総合デザイン専門学校	1
9	ビジュアルアーツ専門学校大阪	1
10	土佐情報経理専門学校	2
11	龍馬情報ビジネス＆フード専門学校	1
12	龍馬デザイン・ビューティ専門学校	2
計		25

就職		
1	就職（県内）	1
2	公務員（県外）	2
計		3

総　計	242

編集後記

「校友からの便り」には、いつものことですが自分の道を進んで、いまなお努力されている人の記事を読むたび感動します。人のために続けているのではないけれど多くの人がこころを動かされます。ご紹介できる私達もまた幸せになります。ふと、「暗いと不平を言うよりは、すすんで明かりをつけましょう。」ということばが頭に浮かびます。

（お詫び）

誤記訂正のお願い
白梅17号　９ページ
坂本（高橋）綾子さんの卒業年
昭和52年→**51**年
（誤）　（正）

お知らせとご報告

学校創立120周年記念事業について

・記念式典
　令和４年６月４日（土）午前10時
　土佐女子講堂
　（参列者は学校内の関係者）

・校友会全国大会
　令和４年６月４日（土）午後１時 受付
　午後１時30分 開会　午後３時30分終了予定
　土佐女子講堂

校友会より学校に記念品贈呈

・６曲屏風紙丁番
　中金貼　黒艶有　金額　1,107,700円